ミルク
生徒会長
魅惑のにゅ～ランキング
小説 神崎美宙
挿絵 あいのせりん
立ち読み版

登場人物紹介

Characters

葛西美雪（かさいみゆき）

櫻南学園の二年生。巨乳がステータスであるという校風を変えるために、生徒会長になろうとしている。Bカップで、ランキングは星なし。

姫乃宮アゲハ（ひめのみや）

櫻南学園理事長の娘で、生徒会長も務めているお嬢様。巨乳至上主義の学園の中で、最もランクの高い三ツ星のバストを誇っている。Jカップ。

長谷川理香（はせがわりか）
アゲハを慕って生徒会のお手伝いをしている一年生。アイドルグループ「キュートバタフライ」のメンバーで、通称「りかりん」。一ツ星でEカップ。

橘花梢（たちばなこずえ）
櫻南学園生徒会の副会長。人見知りを治すためにグラビアアイドルとして活動していたこともあったが、今は引退している。Gカップで二ツ星。

高坂和明（たかさかかずあき）
櫻南学園の一年生。幼馴染みの美雪に豊胸マッサージをお願いされる。

序　章　007
第一章　巨乳至上主義　010
第二章　乳マッサージ　047
第三章　三ツ星バストのお味　085
第四章　甘い誘惑　126
第五章　一途な幼馴染み　167
第六章　激突ミルクにゅ〜対決　194
終　章　247

「わたくしのせいですの？　でしたら、わたくしが責任を持って、最後までお相手してあげなければなりませんわね……」
「え？　それって、どういう……」
勃起したペニスを手で扱きながらお嬢様が意味深な笑みを向けてくる。
「……それは、和明が望むなら……わたくしの全てを差し上げるということですわ」
そして少し頬を赤らめながらスカートをめくり、黒でお揃いのショーツをガーターベルトに包まれた股間を見せつけてきた。その迷いなく言い放たれた言葉の意味を悟り、少年は思わずアゲハのツリ目を見つめ返した。
「どうして、そこまで僕のことを……」
「それは何度も言っているではありませんか……で、ですからわたくしは和明のことが、好き……だからですわっ！　生徒会長としても、女としても美雪さんよりわたくしを応援して欲しいんですのっ……」
そう言ってお嬢様は恥ずかしそうにツンとそっぽを向いてしまう。雪のように白い肌をしている彼女の頬はかなり赤くなっている。
「アゲハさん……あの、その……気持ちはすごく嬉しいんですけど……」
「女のわたくしにここまで言わせておいて、恥をかかせるつもりですの？」
不満げに唇を尖らせたお嬢様は、ウジウジとしてる少年の制服の袖をキュッと掴み顔を近づけた。口調は怒っているが、その瞳はどこか悲しげで少し潤んでいる気がした。

「そ、そういうわけじゃないんですけどっ……えっと、僕……こういうこと、したことがなくて……すみません……」

追い詰められた和明が慌てて童貞であることを告白すると、アゲハは表情を一変させ急に嬉しそうにツリ目を輝かせる。

「まあっ……そうだったんですの？　それでしたらご心配なく。わたくしがリードして差し上げますわ！　てっきり美雪さんに先を越されてしまったと思っていましたのに……和明の初めてをいただけるなんて嬉しいですわ……」

男としてはそこで喜ばれても複雑な気分だったが、すっかり上機嫌になったお嬢様は少年をベッドに仰向けに寝るように促してきた。そして下半身の上に跨がり、魅惑的な笑みを浮かべながら見下ろしてくる。

「おぉっ……アゲハさんのおっぱいが……」

学園一のサイズを誇る爆乳だということは知っていたが、下から見上げるとさらに迫力満点の光景が広がり思わず歓喜のため息を漏らしてしまう。

いつの間にか頭の中はお嬢様のことでいっぱいになり、目の前のおっぱいのことしか考えられなくなっていた。

「オーホホホッ！　やっと素直になってきましたわね……いいでしょう、わたくしのおっぱい……誰にも負けていませんわ……」

童貞少年の熱視線を心地よさそうに浴びながら、アゲハは和明の両手を取り自慢の三ツ

星バストへと導く。
「あっ、あぁんっ……そうですわ……遠慮せず、好きに揉んでいいんですわよ……はぁ、ンぁっ……こ、この胸は和明のものですからね……」
「僕のおっぱい……」
ずっしりと手のひらに伝わる乳房の官能的な重みを生で感じながら、下から持ち上げるようにしてその揉み心地を堪能する。指を精一杯広げても到底収まりきらないサイズを誇りながら、重量に負けず美しいヤシの実のような曲線を保っている爆乳――。
「えぇ、和明だけのおっぱいですわ……」
このおっぱいに触れられるだけで十分幸せなのに、その権利があるのは世界中で自分だけ。そんなことを言われて胸が熱くならない男子などいるはずがない。
（僕だけ……この爆乳は僕だけのもの……学園ナンバーワンのアゲハさんのおっぱいが僕のだけのおっぱいなんだ！）
和明の心はだんだんとこの高飛車お嬢様の虜になりつつあった。
「そして……和明はわたくしのものですわ……」
胸を揉む手つきが積極的になり少年の反応の変化を感じ取ったのだろう。満足げに呟きながらアゲハは片手を滑らせ、ギンギンに勃起したペニスを握り締める。
「はぅっ！」
揉み応え抜群の乳揉みに夢中になっていたせいで、当然下半身に甘い刺激が走った瞬間

に腰が波打った。
「ふふ、分かっていますわ……そんなに急かさなくても、すぐにわたくしの中を味わわせてあげますわ……」
和明自身というより下半身に語りかけながらゆっくりと両脚をM字に広げていく。グラビアアイドル顔負けの爆乳の持ち主ながらスラリとした太股の奥に、黒いアダルティなショーツが覗いている。
「ア、アゲハさんっ……」
お嬢様の下着をバッチリとまぶたに焼きつけてしまい、興奮で思わず声が上ずった。
「心配しなくても、全てわたくしに任せれば大丈夫ですわ……」
お嬢様は逸物の根元を固定し、反対の手でショーツの股布をずらしながらゴソゴソと腰を動かし蜜で濡れたワレメを亀頭にあてがう。
ぴちゅっ……。粘膜同士が触れあい、熱く潤んだ肉の感触が先端から伝わってくる。
「……い、いきますわよ……和明の童貞、わたくしが卒業させて差し上げますわ……」
そう言って腰をじわりじわりと沈めていくお嬢様だったが、すぐに腰の動きが止まってしまった。余裕たっぷりだった表情も心なしか強張っているような気もする。
「アゲハさん……大丈夫ですか？　無理しなくても……」
乳房を揉んでいた手を下ろし心配そうにその美貌を見上げると、アゲハは慌てて金髪の巻き毛を揺らして首を横に振った。

「だ、大丈夫に決まっていますわ！　その……いきなり、挿入れてしまったら、和明がすぐに果ててしまうのではないかと心配していただけですわっ……」
語気を強めて再び腰を沈めようとするお嬢様だったが、相変わらず細い身体はガチガチになり見るからに顔が引きつっている。
「あ、あぁっ……和明が、わたくしの中に……はぁ、あぁンっ、ンンっ!!」
それでもアゲハはゆっくりと腰を落とし、痛いくらい勃起したペニスを膣肉で包み込んでいった。驚くほど狭い膣壁は異物を吐き出そうと強烈に締めつけてくる。
ブチッ――――。
「あひぃっ！　あは、あぁぁぁっ……」
彼女の悲鳴と何か薄膜を突き破るような感触が、金髪生徒会長の様子が明らかにおかしかった原因を悟らせた。
「まさかっ、初めてだったんですか⁉」
「あ、当たり前ですわ……わたくしの身体に触れていいのは、和明だけだと言ったではありませんか……」
当然だと言わんばかりに少し涙目になっているツリ目で見つめてくる。少年は童貞卒業の喜びに浸る間もなく、宝石のような瞳を見つめ返した。
「それは……で、でも、痛くない……わけないですよね……」
「べ、別に痛くなんてありませんわ……」

口では大丈夫と言いつつも、ぺたんとヒップを少年の股間に沈めたまま動けなくなっている。

（アゲハさん、初めてだったんだ……僕に処女を捧げてくれたんだ……）

多少性格に難はあるものの今風の美少女で、何と言ってもこの爆乳だ。巨乳がステイタスとされる学園内でも最高ランクの三ツ星バストの持ち主。かなりモテるだろうと思っていたし、現に性的経験も豊富みたいなことを言っていただけに正直驚いた。

しかし梢たちがアゲハは他人に身体を見せたがらないと言っていたのも思い出し、改めて彼女の自分への想いの大きさを知り嬉しくなってくる。

「これで和明はわたくしのもの……それから、わたくしは和明のものですわ……」

そう言ってお嬢様は自慢の爆乳を胸板に押しつけるようにして抱きつきながら、両手で少年の頬を挟み満足げに呟く。

「そこまで僕のことを……」

彼女を疑っていたわけではないが、あまりに高嶺の花だと思っていた美少女生徒会長から言い寄られても今までは何となく実感がなかった。しかしパイズリ奉仕に加えて、先ほどまで童貞だった勃起ペニスはお嬢様の処女肉に深々と突き刺さっている。

「ええ、大好きですわ……ですから和明もわたくしをいっぱい愛してくれないと、許してあげませんわっ……」

「アゲハさん……」

高飛車な性格だと思っていたが、惚れた相手には一途で真っ直ぐ。ちょっと素直になれないところも、彼女の想いを知った今となってはむしろ可愛らしく見える。
物心ついてから今まで女の子と言えば美雪しかいなかったが、ツリ目のお嬢様の存在が急速に大きくなっていくのを感じた。
「そろそろ動いてあげますわね……わたくしの中が気持ちいいからって、すぐに出してしまわないようにしなさい……」
しばらく騎乗位で繋がったまま見つめあっていた二人だったが、不意にアゲハが腰を浮かせ始める。
「あっ、アゲハさんっ……無理しないでくださいっ……」
「無理ではありませんわ……んはぁっ……す、すぐに気持ちよくしてあげますわ……」
余裕を見せようとするお嬢様だったが表情は引きつり息遣いも荒く、まだ破瓜の痛みが完全に引いたわけではなさそうだった。それでも気の強いアゲハはあくまでも少年をリードしようと、フラフラしながら腰を上下に揺らし始める。
「あぁぁっ……き、気持ちいいっ……」
ゆっくりとペニスが吐き出され、蜜で濡れた表面がザラつく膣肉と擦れあい甘美な痺れが股間から全身に駆け巡った。
「あ、あンっ、あぁン！　こ、これは刺激が強すぎて、わたくしまで変な気持ちになってしまいますわ……はう、うぅんっ……」

グッチュ、グチュッ、グチュ、グチュチュッ……。
お嬢様が腰を振るたびに太陽のような金髪の巻き毛が輝きをちりばめるように揺れ、魅惑のJカップ爆乳がゆさゆさとダイナミックに弾んでいる。
「ア、アゲハさんっ……おっぱいが……すごいエロいですっ……」
「きゃんっ！　い、今……胸を揉まれたら、ミルクがっ……」
「でも、倒れないようにしないと……」
不安定な彼女の上体を支えてあげようというのは建前で、本当は目の前で暴れる三ツ星おっぱいを揉みまくりたかった。なんたってこのおっぱいを好き放題できるのは世界中で自分だけなのだ。
「そんなに強く揉んだらダメ、ですわっ……本当にミルクが、あぁっ……ひぃあンっ！」
両手を思いっきり広げてずっしりと重みのあるおっぱいを揉み搾ると、アゲハは可愛らしい悲鳴を上げながら身悶えしている。弾力ある揉み応えが手のひらに伝わってきて、同時に乳房全体がパンパンに張っているのも感じた。
「どうして揉んだらダメなんですか？」
「で、ですから……ミルクが、あぁンっ……和明にかかってしまいますわっ……」
胸を搾られ慌てるお嬢様だったが膣をペニスで抉られている状態では身体が言うことを聞いてくれないらしい。言葉だけの抵抗を無視して和明が学園一の爆乳を思う存分揉み揺らし、乳首を指先で摘んで転がした瞬間――。

ぷしゅっ、ぴゅるるっ、ぴゅぅぅっ……ぴゅ、ぴゅぅぅぅ〜〜〜っ！
「あぁン、あンっ！　ミルクが、ミルクが出てしまいますわっ！」
見上げるようにそびえる両乳から勢いよく白いミルクが二本の放物線を描いた。
力を込めれば込めた分だけミルクタンクと化したお嬢様のバストからは真っ白なミルクが噴き出し、辺りにはミルクの甘い香りが充満する。
「ミルクを搾ったら、綺麗に舐めるんでしたよね……」
上体を起こしてミルクを滴らせているおっぱいにむしゃぶりつこうとしたが、両肩を掴まれてベッドに押し戻されてしまう。
「も、もう……和明ったら、わたくしが気持ちよくして差し上げようと思っていましたのに……はぁはぁ、んっ……」
盛大に射乳させられたアゲハは頬を染めながら悔しそうに唇をへの字に曲げている。一人だけ恥ずかしい思いをさせられたのが気に入らなかったらしい。
「今度はわたくしが和明のミルクを搾ってあげますわっ……」
負けん気の強いお嬢様はそう宣言すると、再び腰を上下に揺らし始める。愛液をたっぷりと分泌しドロドロになっている熱い膣壁とペニスが擦れ、甘美な刺激が下半身に広がっていく。少年はお嬢様に対抗するように両乳を揉み続けているせいで、アゲハの腰の動きはぎこちない。
「こ、こらぁ……じっとしてなさいと言ってますのにっ……あ、あン、胸はダメ……ダメ

ですわっ……」

小玉のスイカくらいあるサイズを誇りながら超敏感体質なおっぱいだ。胸を揉むたびに金髪少女が悩ましげに腰をうねらせ、悶える姿が牡の劣情を猛烈にかき立てる。

「アゲハさん、めちゃくちゃエロいですっ……」

もっとお嬢様の膣肉を味わいたいという湧き上がる感情のままに身体は自然と動き出していた。

「ひゃンっ！　あ、はぁンっ……そんな、いきなり激しいですわっ……ダ、ダメっ……そんなに突き上げられたら、何もできなくなってしまいますわっ……」

突然に下からペニスを突き立てられたアゲハの肢体が大きく仰け反る。彼女の腰振りとピストンが重なり、肉棒と膣壁が擦れあう強さと快感は一気に跳ね上がった。

「うぁっ……アゲハさんの中、とても気持ちいいですっ！」

「そ、それは分かりましたから、もう少しゆっくり……あ、あぁンっ！　和明が、奥まで入ってきてますわっ……」

生まれて初めて感じる女性の子宮口を突き上げる感覚。自分が腰を突き上げるたびにあの高飛車お嬢様がおっぱいをこれでもかと揺らしながら可愛らしい声で喘いでいる。

ズッチャ！　ズチャ、ズッチャ！　ズリュ、ズチュッ、ズリュゥゥッ！

その姿に興奮した少年は我を忘れて下半身を振った。

相手は処女なのだから優しくしなければとか、あまり飛ばしすぎるとすぐ射精してしま

うとか頭では分かっている。それでも勝手に動き出した腰はもう止まらなかった。
「あ、あん♪　は、激しいですわっ……ズンズンお腹に響いて……胸まで搾られて、ミルクが止まりませんのぉっ……わたくし、変になってしまいますわっ！」
年下の少年をリードしようとしていたお嬢様だが、完全にされるがままの状態になっている。それをいいことに和明は思う存分にアゲハの身体を貪った。
「すごい気持ちいいです！　アゲハさんのおっぱいも、中もっ……」
美少女を下から力任せに突き上げながら胸を揉んでミルクを搾る。オナニーなんかでは到底味わえない快感と満足感に全身を満たされながら、少年は急速に絶頂への階段を駆け上がっていった。
「わ、わたくしも……気持ちいいですわっ……初めは痛かったのに、今は……和明でいっぱいになってて、あ、はぁっ……」
学園一のサイズを誇る爆乳の先端からダラダラとミルクを漏らしながらアゲハも長い金髪を振り乱しながら快感を訴える。何せついさっきまで童貞だったもので相手を気遣う余裕もなかったが、お嬢様も感じてくれていることを知り嬉しくなった。
（アゲハさんも気持ちいいんだ！　もっと気持ちよくなってもらいたいっ……）
快感を共有していると思うと、なぜこんなに心が満たされてくるのだろうか。
調子にのった少年はさらに力いっぱい腰を振り上げる。グイグイと締めつけてくる膣肉と限界まで勃起した男根が激しく擦れて、今にも射精してしまいそうなほど気持ちいい。

「あぁンっ！　か、和明っ……そんなに乱暴しちゃダメですわっ！　ズンって、子宮に響いて……それ、繰り返されたら……わ、わたくしっ……ひぃあぁあぁっ!!」

お嬢様の身体が股間の上で跳ね、ミルクで濡れた爆乳がさらに大胆に弾む。

「す、すみませんっ、アゲハさん……僕、もうっ……出そうっ……」

後先考えずにピストンを繰り返した結果だ。これだけ激しく膣肉との快感摩擦を味わっていたせいであっという間に童貞ペニスは限界にまで達してしまう。

「ですからもっとゆっくりと……はぁ、いぃンっ……言いましたのにっ……まったく、仕方ありませんわねっ……」

お姉さん風を吹かせ口を尖らせるお嬢様だったが、眉尻はすっかり下がり普段見たことがないような蕩けた表情をしているせいで説得力がまるでない。

「アゲハさんも、一緒にイってください！」

「そ、そんなこと言われましても……あ、ひンっ！　胸はダメっ……ミルク搾られたら、あ、あぁン……ミルクっ！　ミルク気持ちいいですわっ！」

蜜で濡れた膣肉と先汁を漏らしているペニスが擦れあい、乳房を揉み搾る両手がドロドロになるほどミルクは飛び散り、マッサージルーム内に淫らな水音が響き渡る。

「や、やばいっ……もう出ます！　このままじゃ、中に……うぁぁ！」

跨がられているので彼女がどいてくれないと中出ししてしまう。股間の奥から駆け上がってくる射精衝動を堪えきれなくなった少年が必死に叫ぶ。

「いいですわよっ、このまま中にっ……いぃン、あ、はぁぁっ……和明のミルクをわたくしに飲ませて欲しいですわっ！」
しかしアゲハは膣からペニスを抜こうとはせず、むしろもっと深く咥え込もうとするかのように激しく身体を上下に揺らし爆乳をたっぷんたっぷんと揺らしながらヒップを打ちつけてくる。
「あぁっ、出る！　出ますっ!!」
一瞬躊躇ったが、今はもうそんなことを考えている余裕はなかった。
両手を伸ばし三ツ星バストからミルクを搾りながら、限界まで勃起したペニスをアゲハの子宮口に叩きつけた。
「ひぃン！　あ、頭が真っ白になってしまいますわっ……はぁ、あひぃぃぃ！　ミルク、おっぱいが止まりませんの！　ミルク、ミルク、ひぃぃあぁっぁぁ～～～ッ!!」
二人の腰使いが重なり、腰が砕けそうなほどの快感が全身に走る。
「イクっ！　アゲハさんっ、イきます!!」
今までで一番奥深く肉棒を突き立てた瞬間に目の前が白く弾けた。
ドビュウウ！　ビュルルッ！　ビュブブッ、ビュッ、ビュルルぅぅぅッ!!
「はぁ、あぁぁっ！　な、中にぃ、和明のミルクが……いっぱい、いっぱいぃっ……いっぱい出てますわぁぁっ……わたくしもミルクがっ、ンはぁ、あぁぁンっ！」
ぴゅるる～～～っ！　ぴゅー、ぴゅーッ！　びゅ、びゅびゅっ、びゅるるるっ!!

大量のミルクは少年の口の中に、また身体を飛び越えて床へと降り注いだ。口内には濃厚な味が広がり、甘い香りが鼻へと抜ける。
「はぁはぁ……ミルクを搾られるのって、こんなに気持ちいいんですね……」
「アゲハ様が夢中になっちゃうのも分かるかもぉ……」
荒い呼吸を繰り返しながら美少女たちは乳搾りの悦に浸っていた。
和明もしばらく二人を感じさせ射乳させた満足感と、吸えば吸うだけ揉めば揉むだけ溢れてくるミルクの味を堪能する。
「あの……気持ちよかったですか？」
返事は聞かなくても何となく分かっていたが、少年が尋ねると梢も理香も大きく頷く。
「うん、すっごくよかったよー。和明君はマッサージの天才だね」
「お恥ずかしい話ですが、とても感じてしまいました……」
顔を赤く染めたアイドル少女とグラドル少女は口々に少年を褒める。そこまで言われると恥ずかしい気もしたが、やっぱり嬉しい。
「ねぇねぇ、それじゃあ理香たちのおっぱいはどうだったかな～？」
「どうって……それはもちろん気持ちよかったですよ……」
少年が即答すると、今度は梢がモジモジと指を絡めながらこちらを見つめてくる。
「アゲハさんや美雪さんと比べて……どうだったでしょうか？　誰が一番ですか？」
「え、い、いや……それは、えっと……何と言うか……」

思わぬ質問を受けた和明はどう答えていいか分からず慌てた。頭には美雪とアゲハの顔が浮かび、特にアゲハとの初体験シーンが鮮明に蘇る。

「あ、それ気になるー、理香が一番？」

三ツ星バストのアゲハを始め、学園トップクラスの美少女たち四人の胸を揉みまくりミルクまで搾っている。サイズや形はもちろん、弾力や肌の張りなど個人差はあるが、どれも極上の揉み心地を誇るおっぱいばかりだった。

誰が一番かと言われてもそれぞれによさがあり、簡単に順位はつけられない。少年が黙り込んでいると、アイドル少女は残念そうにため息をつく。

「えー、理香が一番じゃないんだぁ……やっぱり美雪先輩？　それともアゲハ様？」

「だからそういうわけじゃなくて、みんな一番というか……」

慌ててフォローしようとしたら、二人はなぜか笑顔を浮かべている。

「じゃあ、もっともっと理香たちのおっぱいのよさを知ってもらわないとだね！　ねー、梢ちゃん♪」

「そうですね……今度は和明さんに気持ちよくなっていただきましょう」

梢と理香はまるで事前に打ち合わせをしていたかのように、アロマオイルとミルクでヌルヌルになっているおっぱいを丸出しにしたまま和明をベッドへと押し倒した。

「え、え？　どうしたんですか、ちょっと何を……」

いきなり仰向けに寝かしつけられ慌てる少年を他所に、美少女たちもベッドによじ登っ

てきて股間を覗き込む。
「えへへ～、和明君の大好きなおっぱいでココをマッサージしてあげるね～」
「和明さん……失礼します……」
ダブル乳搾りの興奮ですっかり隆起したペニスがズボンにテントを張っていた。
「はぅっ、うぅぅ……」
二人の手が次々にベルトやファスナーを外していき、ついにはパンツごとズボンをズリ下ろしてしまう。股間に伸びる手を無理やり払いのけるわけにもいかず、天井に向かいいきり勃つ逸物が美少女たちの視線に晒された。
「わぁ～、すごーいっ……もうビンビンだね～」
「こ、こんなに大きくなって……痛くないですか？」
梢も理香も一度フェラチオをされているので見られるのは初めてではないが、同年代の異性に性器を凝視されるのはやはり恥ずかしい。しかしそれ以上にあの時の興奮が蘇り、少年の胸は羞恥以上に期待で膨らんでいた。
「はい、理香のおっぱいで扱いてあげる～♪　ほら、梢ちゃんも早く～」
童顔少女は小柄な体型に比べかなり発育のいいバストを両手で持ち上げるように押しつけてきた。
むにゅン――。つきたてのお餅のように弾力ある温かい乳肌がペニスを包む。
「えっと……こう、でしょうか……？」

梢も同年代の平均を遥かに凌駕したGカップのバストを寄せ上げ、反対側から理香と同じように肉棒を挟み込んだ。

「うぁ！　あぁぁっ……き、気持ちよすぎます……」

さっきまでこの手で揉み搾っていた四つのおっぱいが今度は自分のペニスを中心にひしめきあっている。雲の上の存在だと思っていた学園を代表する美少女二人が、ダブルパイズリをしてくれているのだ。牡の本能を刺激され、ギンギンに勃起した逸物の先端からはすでに透明な涎が溢れている。

「あンっ……梢ちゃんのおっぱいと擦れて、なんだかジンジン痺れてきちゃう……」

「そ、それに……和明さんの、とっても熱いです……」

二人とも顔を赤く染めながら熱っぽい吐息を漏らしながら、自分の乳房を重たげに抱え上下に揺らした。オイルとミルクまみれになった温かい乳肌とペニスが密着し、股間が蕩けてしまいそうなほど甘い刺激が下半身に広がる。

（うっ……こ、こんなことされたら、我慢できなくなるよっ……）

巨乳ランカー二人から自慢のおっぱいでサンドイッチにされた逸物は亀頭の先から竿の根元まで完全に乳房の中に埋もれてしまっている。

アゲハにパイズリをしてもらった時も感動したが、二人同時とあって迫力はさらに倍になり圧巻の光景が目下に広がっていた。

「サイズではアゲハ様に勝てないけど、和明君を気持ちよくしてあげたいって気持ちは負

けないよっ……」
「あら、それでしたらわたしも負けませんよ……」
アイドル少女とグラドル少女は先を争うように自らの乳房を上下に揺らし、乳圧の快感に打ち震えていたペニスを扱き始める。なめらかな乳肌と肉棒が擦れて、すぐに甘い痺れが股間に広がっていく。
「はぅ！　そ、それっ……すごい、いい……ですっ……」
アゲハは胸が大きすぎてこの上下運動に苦労していたが、二人は四つのおっぱいをゆさゆさと大胆に弾ませながら乳摩擦を繰り返した。アロマオイルとミルクのおかげでヌメる乳肌とペニスが擦れるたびに、にちゅにちゅと淫らな水音が響く。
「はぁ、ンっ……先っぽが擦れて……ミルクが、出てしまいますっ……」
アロママッサージでミルクが出るようになった梢の乳房は、ペニスや理香のおっぱいとぶつかりあいさらに白い乳液を滲ませている。
「ひゃう！　梢ちゃんのミルク温か～いっ……」
そう言って声を弾ませているロリ娘の巨乳からもミルクが溢れ、胸の谷間はたちまちミルクの海と化した。潤滑を増した乳肌はどんどんとなめらかに逸物と擦れあう。
「どうですか、和明さん……んっ、ンふっ……わたしの胸は……」
「あはっ、梢ちゃんと理香どっちが気持ちいい？」
ほんのりと頬を染めた二人は重たげに乳房を揺らしながらジッと見つめてきた。

「どっちって……どっちも気持ちいいですっ……」
二人のおっぱいが同時にペニスを扱くので、常に乳肉に包まれたまま摩擦の快感が股間に流れ込んでくる。そんな状態ではどっちがどっちとか言えるはずもない。
とにかくダブルミルクパイズリが気持ちよすぎて、壊れた人形のように何度も首を縦に振ることしかできなかった。
「えー、じゃあ～……こんなのはどう？　ちゃんと勉強したんだよ～」
理香はミルクの滴る硬く尖った乳首をペニスに向け、左右の乳房の交互に上下に揺らし始める。むにゅむにゅと柔らかい乳肉の感触とは違うコリッとした刺激が快感漬けになっていた逸物に新たな刺激を流し込む。
「うぁっ！　り、りかりんの乳首がっ……乳首が擦れてるっ……」
快感のあまりに背中が仰け反り股間を突き上げてしまう。
「り、理香さん……ズルいです、そんなのダメですっ！」
少年のあまりの反応のよさに嫉妬したのか梢はサイズ差にものをいわせ、アイドル少女の巨乳を押し退けるように胸を突き出した。
「あぁんっ……梢ちゃんったらそんなにおっぱいグリグリ押しつけないでよぉ～」
梢の爆乳にポジションを取られてしまいそうになった理香は、負けじと自分の乳房を抱え直した。サイズでは負けても弾力勝負ならツインテール娘の方に分がある。
「でも、こうしないと……あ、ぁンっ……ミ、ミルクが出てしまいますっ……」

真正面からEカップ乳をぶつけられたグラドル少女の柔らかおっぱいは押し潰されてしまい、パイズリの場所取り勝負は再びの五分に戻った。しかし二人の乳房は淫らに形を変え、先端から大量のミルクを溢れさせている。
「はぅ、くっ……す、すみません……もう我慢が、できない……ですっ……」
甘いミルクの香りが全身を包み、激しい乳擦りの間に挟まれたペニスは歓喜の悲鳴を上げ痛いくらいに勃起していた。股間の奥から込み上げる射精欲を抑えきれなくなり、美少女たちの胸の谷間からわずかに顔を覗かせる先端からは我慢汁が溢れている。
「いいよぉ、我慢しないで理香のおっぱいでいっぱい気持ちよくなって～」
「ンふ、うぅ……そうです、好きな時に出してくださいっ……」
少年の限界が近いことを知った梢と理香は、ますます強く乳房を押しつけてきて射精を促した。二人は競いあうように絶頂寸前のペニスを異なる乳圧で包み込み、ミルクとオイルで滑る温かい乳肌で扱き続ける。まるで精液を搾り取ろうとするかのように、限界寸前の逸物を激しい乳圧が襲った。
「うっ……あぁぁっ！　もう、出ますっ！！　で、出るっ!!」
ダブルパイズリの快感に腰は浮き上がり、無意識のうちに下半身を突き上げていた。
「あ、あぁっ……熱いっ！　和明君のオチ〇チンすごく熱いよぉっ！」
「わたしの胸の中でビクビクって震えてますっ……ひぃあぁンっ……」
学園を代表する美少女二人のおっぱいの中で勃起男根は脈動する。

和明が声をかけると、黒髪少女はまるで花が咲いたかのようにパァッと表情を明るくし満面の笑みで頷く。しかし他の三人は一斉に残念そうにため息をついた。
「ちょっと、和明！　恋人のわたくしを差し置いて、どういうことですの⁉」
「やっぱり美雪先輩かぁ……いいなぁ……」
「羨ましいです……わたしも真っ先に選んでいただきたかったです……」
中でもアゲハは自分が一番だと自信満々だっただけに、明らかにショックを受けている様子。普段が普段なだけにあの高飛車お嬢様が素直にしょんぼりしている姿は、ある意味とても可愛くて新鮮だった。
「すぐにアゲハさんともしますから、少しだけ待っててください」
「ホントですわね？　絶対ですわよっ……」
ツリ目を少し潤ませながらアゲハは腕を解き少年から離れる。
「あー、和明君、アゲハ様だけ〜？」
「もちろん、りかりんも梢さんも順番にしますから」
少年はアゲハたちをなだめながら美雪をそっとベッドに押し倒した。
「あ、んっ……きて、カズ君……」
首に腕を回して抱きついたまま上目遣いに見つめてくる美雪に唇を重ねながら、手探りでスカートをめくりショーツを横にずらした。そしてすっかり勃起してしまった逸物の先端を彼女のワレメにあてがう。

「ひゃんっ！　カズ君の、とても熱いっ……」
クチュッ――と粘膜同士が触れあった瞬間に美雪の身体が跳ねた。すでに蜜で濡れた淫唇はまるで少年を迎え入れるかのように膨張した亀頭に吸いついてくる。
「何ですの……和明ったら、そんなに優しくして……」
お嬢様ほど露骨に不満げな顔はしていないが、梢も理香も羨ましそうに美雪を見つめていた。彼女たちに見つめられながらエッチするのも恥ずかしかったが、湧き上がる欲望を抑えきれなくなり腰を突き出していく。
「あぁぁぁっ！　挿入ってくるっ……カズ君が挿入ってくるぅっ……」
つい先日まで処女だった狭い膣壁は中へと進入してきたペニスを激しく締めつける。
「うぅっ……美雪姉の中、キツくて……すぐ出そう……」
挿入しただけで射精しそうになるほど気持ちいい膣内だった。いきなり達してしまわないように下半身に力を込めながらじわじわと逸物を沈めていくと、やがて先端が行き止まりに辿り着く。
「わ、私も、いいよっ……お腹がカズ君でいっぱいになって……すごく、すごく気持ちいいのぉ……」
学園一の才女がうっとりとした表情を浮かべ、口も半開きにして荒い呼吸を繰り返している。熱っぽい吐息を漏らしている色っぽい唇に吸い寄せられそうになった時だった。
「……美雪さんとばかりイチャイチャするなんて、ズルいですわ……ンっ……」

「え、アゲハさんっ……ンむっ!?」
お嬢様は恋敵から引き離すように少年に抱きつきキスをしてくる。しかもたっぷりと唾液を含んだ舌をねじ込み、両手を自分の乳房へと導く。
「ちゅっ、ぢゅっ……ほら、わたくしの胸ったら……和明に飲んでもらいたくてこんなにミルクが溢れてますわ……」
触れる前から白く濡れていたアゲハの乳房は、少年が軽く揉んだだけで勢いよくミルクを噴き出し甘い香りを飛び散らせた。
「ちょ、ちょっとっ……カズ君は私とエッチしてるんだから邪魔しないでよねっ！」
二人だけの空間を作り始めていたところを邪魔され、黒髪少女は吐息交じりの声で抗議する。
「うるさいですわ！　梢、理香、美雪さんをさっさとイかせてあげなさい」
しかしお嬢様は悪びれた様子もなく少年に抱きつきながらディープキスを繰り返す。
「あ、美雪先輩が満足すれば早く順番が回ってくるってわけですねっ……」
「そういうことでしたら、わたしもお手伝いします……」
ワガママお嬢様とは違い、少年に言われた通り大人しく順番を待っていた二人だったが、四つん這いになり左右から美雪に近づく。
そして右の乳房に梢が、左の乳房に理香がしゃぶりついた。
「え、な、なに？　二人とも……あぁ、ンンっ……胸はダメぇっ……」

「うわっ！　美雪姉っ……すごい締まるっ……」
突然の同性からの愛撫に驚いた美雪の膣が激しく収縮する。ヒダの少ない膣壁がキュッキュと締めつけ、動かす前からどんどんと射精欲が湧き上がっていく。
「わぁ〜、美雪先輩のおっぱいって本当に形が綺麗ですよねー」
「それにお肌もスベスベで羨ましいです……ちゅ、ちゅぅっ……」
挿入されている美雪の胸に舌を這わせながら、その両隣でお尻をふりふりとさせている梢と理香。さすが女の子同士ということもあり感じるポイントを心得ているのか、二人に乳房を責められ黒髪少女の喘ぎ声はますます大きくなる。
「やっ、いやぁ……今そんなことされたら、ミルクが出ちゃうっ……」
Dカップのおっぱいは二人の少女に揉まれていやらしく形を変え、ツンと尖った乳首に滲んだミルクを舐め取られている。思わぬ美少女同士のレズシーンを見せつけられ、胸の鼓動は一気に跳ね上がった。
「み、美雪姉っ！」
考えるより先に身体が反応する。アゲハのミルク乳房を揉みながら、自然と腰が前後に動き勃起ペニスで美雪の膣を突き上げた。
まだ硬さは残っているが熱く濡れた膣肉はペニスに絡みつくようにしゃぶりつき、小刻みに締めつけてくる。この前まで処女だったとは思えないほど、膣内は肉棒に馴染み極上の快感が股間に広がっていった。

「あ、あぁン！　奥に当たってるっ……いきなり、ひゃ、ンぅ……ッ！」
乳愛撫に加えて膣奥を責められた美雪は甲高い悲鳴を上げて悶える。梢たちにミルクを搾られているのが恥ずかしいのか、顔は真っ赤になっていた。
「……そ、その調子ですわ。和明も我慢せずに、イっていいんですのよ……」
熱っぽい喘ぎ声を上げる優等生をしばし見つめていたアゲハは、ハッとして和明へと視線を戻し口付けを再開する。少年の手に自分の手を添えてバストを揉ませるお嬢様の狙いは、興奮を煽って和明を早く射精させようということらしい。
（あぁっ！　美雪姉の中もアゲハさんのおっぱいも気持ちよすぎるし、梢さんもりかりんもエッチすぎるっ!!）
幼馴染みの膣に挿入している快感だけでも全身が蕩けてしまいそうだったのに、お嬢様のせいでますます射精欲が強くなっていく。そして美雪の胸を責める二人の美少女から視線を離すことができない。
「ねぇねぇ、和明君……このまま理香ともエッチしてぇ……」
そんな少年の熱視線を感じ取ったのか、アイドル少女は小ぶりのヒップを高く掲げてスカートをめくった。そして露わになったショーツを横にずらし、挿入をねだってくる。
「……でしたらわたしにも……わたしも和明さんを感じたいです……」
それを見た梢まで黒髪少女の胸をしゃぶりながら、同じようにお尻を突き出した。こちらは十代とは思えないほど肉付きのいい豊満な桃尻を揺らめかせる。

「ちょっと！　梢も理香も余計なことはしなくていいですわっ！」
お嬢様が血相を変えて叫ぶが、それはとても魅力的なお誘いだった。
「ダ、ダメぇ……私の中から出て行っちゃダメぇ……」
幼馴染みも少年の考えていることを察したらしく、イヤイヤと首を横に振る。しかし大好きな男の子に膣内をかき回されながら同性に胸を搾られて感じすぎているせいか、その声は弱々しくて語尾はほとんど聞こえなかった。
「ひぃンっ……あぁ、抜けちゃうっ……中が擦れて、あぁ、ンぁぁぁっ……」
そんな可愛らしい彼女の膣で一回果ててしまうのもよかったが、横に並んだ美少女三人を同時に味わうという誘惑に負けてしまいペニスを引きずり出した。
名残惜しく感じたが、その思いも込めて隣にいる理香の膣口に美雪の愛液で濡れた亀頭を向ける。
「か、和明っ……そんな、ダメですわ！　これでは、わたくしだけっ……」
「いいよ、理香の中にきてっ……」
慌てるお嬢様の声は嬉々としてこちらを振り返る理香の声でかき消された。
「……挿入れるよ、りかりん……」
ツインテール娘は無言で頷いた。両手はアゲハに掴まれているので、腰だけを動かしてペニスを淫唇に近づけると理香が手で導いてくれた。しかし興奮しているせいで上手く身体が制御できず、一気に膣奥まで逸物をねじ込んでしまう。

「きゃうっ！　あ、あぁっ……すごいよぉ、和明君でいっぱいになってるぅ……」
激しく貫かれた反動で彼女の赤いツインテールが前後に揺れ、可愛らしい悲鳴が室内に響く。美雪よりヒダの多い膣肉はペニスに柔らかく絡みつき、股間が蕩けてしまいそうなほど気持ちよくて思わずそのまま何度も腰を叩きつけてしまう。
「和明さん……わたしにも、お願いします……」
それを見た梢も負けじと大人びた色香を漂わせるヒップを押しつけてきた。
「わ、分かりました……すぐに挿入れますからっ……」
理香の膣から腰を抜き、今度は梢の中へと挿入する。今までの二人よりも締めつけは強くないが、蕩けるような柔らかい膣肉がペニス全体に絡みついてきて射精を促すように蠢いていた。
「もうっ、カズ君！　早く、私のところに戻ってきてよっ……」
「理香だって、全然満足してないよ……もっと和明君に挿入れてもらいたいもん……」
誰かに挿入すれば他の二人が自分にもと急かしてくる。
梢も何度か膣奥を突き上げてから、美雪、理香と立て続けに蜜でドロドロになった膣の具合を味わい比べていく。
「もうっ……美雪さんたちばっかり……んっ、ちゅっ……和明はわたくしの胸を揉んで、気持ちよくなればいいんですわっ……ちゅ、チュク、ちゅぅぅ～～～」
今さら彼女たちの横に並んでエッチをおねだりするわけにもいかなくなったのか、お嬢

様は頑なに少年の両手に胸を押しつけキスをやめようとはしない。
（あぁっ、ダメだっ……もうイキそうっ……）
室内には蒸れた汗の匂いと甘いミルクの香りが充満し、射精欲は高まる一方だった。
それでも自分を求めてくれる少女たちの期待に応えようと次々に、膣肉を勃起男根で突きまくる。それぞれ感触は違うが愛液で濡れた膣壁がペニスを激しく扱き、腰が砕けそうになるほどの快感が全身を駆け巡った。
ズチャ！　ズリュッ！　ズチュッ！　ズッチャズチャッ‼
「すごいよぉっ……きゃ、あ、あンっ……奥が擦れて、気持ちいいのぉっ……」
「ン、んぅっ！　はぁ、あぁ……素敵です、和明さんっ……もっと、もっとわたしで気持ちよくなってくださいっ……」
少しでもお留守になる時間を少なくしようと挿入していくペースを上げるが、やはり中心にいる美雪の中にいることが多くなる。
そのためか梢と理香はバックで突かれながらも、黒髪少女の胸を責め続けていた。そんな二人の胸も直接揉んでいないのにミルクをポタポタと滴らせ、ベッドのシーツを濡らしている。
「あ、あぁンっ、私ばっかり……お、おっぱい搾られてっ……中も、カズ君でいっぱいになって……気持ちよすぎて、頭がおかしくなっちゃうっ！」
両乳を揉み搾られている美雪の乳房からはまるで噴水のように大量のミルクが溢れ続け

ていた。そんな光景がますます興奮を誘う。
「……ちゅ、ん、ぷはぁ……和明、もうイキそうなんでしょう？　我慢せずにイって、早くわたくしを抱いて欲しいですわっ……」
少年が左右に移動しても離れまいとくっついてくるアゲハが射精を急かす。普段は高飛車なお嬢様の健気な姿も胸を熱くした。
「ご、ごめん！　もう、出そう……出ますよっ!!」
限界寸前のペニスを思いっきり梢の膣から引き抜き、美雪の中へとねじ込み、また引き抜いて理香の膣を力任せに突き上げる。
「あぁ！　激しいっ、和明さんが……わたしの中を出たり挿入ったりしてますっ……」
「カズ君、気持ちいいよっ！　あぁ、あ、あぁっ……もっと、きてぇっ！」
「理香もイッちゃうっ……和明君にイカされちゃうよぉ～～～～ッ!!」
少女たちの甘ったるい嬌声が重なりあう。
そして込み上げる射精欲が全身を支配し、ついに意識が白く弾けた。
「うぅっ！　出るっ……イクぅっ!!」
「ひぃンっ……そんなに強く揉んだら、ミルクが止まらなくなってしまいますわっ！」
自然と下半身に力がこもり、思いっきりアゲハの乳房を鷲掴みにしたまま、美雪の膣奥へとペニスを突き立てた。
ドビュっ！　ビュッ、ビュブブッ！　ビュルルゥゥ～～～～ッ!!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

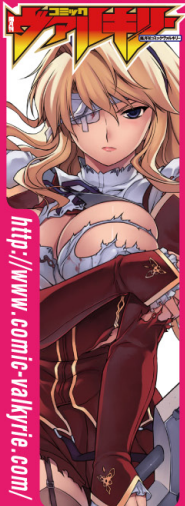
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！